

資料

韓国看護短期研修プログラムの開発及びその成果と課題

塚田久恵^{1§}, 川島和代¹, 曾根志穂¹, 石垣和子¹

概要

地球規模の視野を持ち地域の課題を主体的に解決できる人材（グローバル人材）を育成するため、韓国を研修先とした新たな看護短期研修プログラムの開発を行った。3年の準備期間を経て、平成27年度に8日間の研修を実施した結果、様々な保健医療福祉施設の見学やフィールドワークを組み入れたこと、また、住民等との交流プログラムを積極的に導入したことが功を奏し、所期の研修目的と学習目標はほぼ達成できたと考える。一方、今後は、危機管理体制の整備や授業としての位置づけ、引率教員や現地スタッフの介在等についても考慮する必要がある。研修の円滑な実施には、研修先の選定や関係機関との調整について行政機関の協力を得ることも有効である。

キーワード 看護短期研修, 研修プログラムの開発, 韓国看護, グローバル人材育成

1. 研修プログラム開発の背景

石川県立看護大学は石川県の能登の入り口にあり、これまでも国際的な視野から、健康問題や看護問題を思考、判断し、国際社会及びグローバルな地域で働ける人材、すなわち「グローバル人材」を育成したいと考えていた。グローバルとは、「グローバル」と「ローカル」を合わせた造語である。このため、アメリカ合衆国ワシントン州シアトルにある州立ワシントン大学（University of Washington）と2007年に覚書（MOU：Memorandum of Understanding）を締結し、毎夏、アメリカ看護研修のプログラムを実施し、グローバル人材の養成に取り組んできた。

そうした中、平成24年度に、石川県内の大学が連携して取り組む「ヒューマンヘルスケア人材育成」事業が文部科学省の「大学間連携共同教育推進事業」のプロジェクトの一つとして採択された。ヒューマンヘルスケア人材とは、地球規模の視野を持ちながら地域課題に主体的に取り組む解決できる人材（課題解決型グローバル人材）を言う。アメリカに加え、アジアをも研修のフィールドとして検討していた本学は、これまで取り組んできたグローバル人材の育成をさらに発展させるため、この課題解決型グローバル人材の育成の一環として、韓国を研修先とした新たな看護短期研修プログラムの企画・実施を行うことになった。

本稿の目的は、韓国看護短期研修プログラムの開発経緯、並びに3年間の準備期間を経て平成

27年度に実施した研修の概要とその成果・課題について紹介することである。本稿を通して、海外をフィールドとした看護短期研修プログラムの開発の一助になることを期待する。

2. 研修プログラムの開発プロセス

2.1 研修先の選定・関係機関との調整

これまで本学と交流のない国を対象として研修プログラムを開発しなければならなかったことから、すでに自治体として、諸外国とさまざまな友好交流を行っていた石川県観光戦略推進部国際交流課と韓国全羅北道対外協力局国際協力課の全面的な協力を得て、企画・実施することとした。

まず、研修先である大学の選定については、石川県及び韓国全羅北道の協力を得て調整した結果、韓国全羅北道全州市にある国立全北大学校看護大学が快諾した。

研修の準備として、平成25年11月に韓国全羅北道、全北大学校への訪問と打ち合わせ及び、全州市内保健福祉施設の視察から開始した。依頼先への連絡と視察に際しては、石川県及び韓国全羅北道の協力を得た。全北大学校で、先ず勧められたのは、全北大学校国際交流部企画部主催のFeeling Koreaという既存の文化体験プログラムであった。しかし、そのプログラムは、語学・異文化体験を目的としており、専門的交流を目的とした本学の意図したプログラムと異なっていた。そのため、お互い折衷案を協議したが折り合いがつかず一旦断念することになった。その後、専門

¹ 石川県立看護大学

的交流を目的としたプログラムを開発するため、全北大学校看護大学としての受け入れを要請することとし、平成26年2月に再度全北大学校看護大学を訪問し協議した。結果は、快諾であり、日時やプログラム内容、宿泊先等の研修実現に向けての具体的な内容を検討することができた。

さらに、同年9月、毎年開催される石川県・全羅北道地域活性化交流推進事業に全羅北道関係者が来県した折に、県担当課の厚意により打ち合わせの場が設置された。その時、全北大学校が研修を受け入れるためには、本学との間で覚書の締結を行うことを条件とされ、平成26年11月に覚書の締結を行なった。

その後、平成27年8月に2週間のプログラムで研修を行う予定であったが、韓国国内での感染症MERS (Middle East Respiratory Syndrome) のアウトブレイクにより、やむなく延期となった。再度交渉を重ねて、両大学の大学運営に支障がないような時期を検討し、全北大学校看護大学の新学期に当たる3月下旬に、研修期間を8日間に短縮し実施することになった。しかしながら、全北大学校看護大学は、年度当初の多忙な時期であったことは否めず、結果的に韓国全羅北道の全面的

なサポートを得ることとなった。

3. 研修プログラムの概要

3.1 研修目的・学習目標

本研修の目的は、政治や文化、社会経済の異なる国での保健システムを知り、地域における住民の暮らしや健康課題への対応方法について学ぶことにより、視野を広め、学生の将来の活動において、様々な地域住民の健康づくりにアプローチできるグローバル人材を育成することである。

学習目標は、「韓国の健康課題と対策について理解する」「韓国の保健・医療・福祉システムを理解する」「韓国の町中心部、及び過疎地域での看護職の活動を理解する」「韓国の看護実践およびその背景にある価値観について理解する」「文化交流およびコミュニケーション能力を高める」の5項目とした。

3.2 研修プログラムの構成

研修プログラムは、(1) 事前学習、(2) 現地講義、(3) 現地視察、(4) 交流、(5) 学びの振り返り、(6) 体験、(7) 事後学習で構成した(表1)。先述の本学のワシントン大学との長年に渡る看護

表1 全北大学校看護短期研修プログラム

項目	内容
事前学習	講義：韓国の歴史・文化、暮らしについて 講師：石川県国際交流協会国際交流員
現地講義	内容：韓国の看護教育・健康課題と対策について 講師：全北大学校看護大学学長
現地視察	1. 都市部のフィールドワーク 1) 大学（国立全北大学校看護大学） 2) 医療機関（全北大学校病院） 3) 保健所（全州市保健所） 4) 高齢者福祉関連施設（金堤老人専門療養院、金堤老人専門療養院昼間保護センター） 5) 母子保健福祉関連施設（園光大学漢方病院・産後ケアサービスセンター） 2. 農村部のフィールドワーク 1) 保健診療所（金堤サンジョン保健診療所） 2) 高齢者福祉関連施設（敬老堂・グループホーム）
交流	学生との交流・ディスカッション、住民との交流
学びの振り返り	全北大学校を会場に、研修の学びについてグループワークを行い、全体発表で共有、学びを深める。
体験	全羅北道・ソウル市内の歴史文化施設等の見学・体験
事後学習	「研修に参加しての学び」のレポート、学内報告

研修の経験を踏まえて、学習効果を高めるには、これら7つの小プログラムで構成されるのがよいと判断した。

3.3 現地プログラムの内容

「グローバル人材の養成」を主眼に、特に留意した点は、都市部とルーラルな地域での人々の暮らしや健康課題、保健医療福祉活動の違いや工夫など法的背景を踏まえて韓国の現状を把握するため、都市部及び農村部のフィールドワークを現地視察に入れた。また、異文化に身を置き様々な気づきと興味を促すために、一般住民や全北大学の学生との交流と保健医療福祉施設等の見学・体験を取り入れた。主な視察施設の概要は表2のとおりである。

3.4 日程・参加者の概要

研修は、平成28年3月20日(日)～3月27日(日)の8日間のプログラムで行われ、当大学学生11名(1年1人、2年6人、3年1人、4年1人、院生2人)が参加した。

3.5 本研修プログラムの性格

大学における短期海外研修を通じた国際交流の実践は(1)語学・異文化体験を目的とした短期海外研修、(2)専門的交流(保健福祉領域)を目的とした短期海外研修の2種類にわけられる³⁾。これらの国際交流を通して、学生に言語能力・学習意欲の向上、異文化の理解と順応、滞在国内に対するイメージの改善などの効果が見られている³⁾。なお、「短期海外研修プログラム」について公式な定義がないが、一般的には、2週間から3ヶ月程度、外国にて現地の言語や文化についての学習、あるいは特定の技能や知識の向上を目的とした体験型教育活動をさすことが多く、語学研修、海外実習、ボランティア、インターンシップ、スタディーツアーなどの内容であると紹介されている⁴⁾。

今回開発した韓国看護短期研修プログラムは、期間としては一般的な短期海外研修よりも短い8日間であるが、上述(2)の専門的交流を目的とした研修に該当する。

4. 研修の学び

4.1 学生の研修目標達成状況の自己評価

研修後に、学生に対して研修目標の到達状況に関する質問紙調査を行った。項目は、「韓国の保健・

医療・福祉システム・看護教育を理解する」について3項目、「韓国の看護実践およびその背景にある価値観について理解する」について4項目、「文化交流およびコミュニケーション能力を高める」について4項目の全11項目で、「非常に思う」～「全く思わない」の4段階で回答を得た(表3)。

「視察先で積極的に質問しコミュニケーションがとれた」以外は、すべての項目で、すべての学生が「非常に思う」「思う」と回答した。中でも、「もっと全北大学の看護学生と交流できたらよいと思う」は、11名中10名が「非常に思う」と回答した。

4.2 学生のレポートからの学びの内容

先述の5つの目標を柱に、研修に参加しての学びのレポートの中で、学生が言及している学びに関係する記述を整理し、記述内容を反映していると考えられるタイトルを【 】で付して以下に示した。なお、レポート内容を資料として使用することは、研修参加学生の同意を得ている。

(1) 目標:「韓国の健康課題と対策について理解する」について

「韓国では、孤独死防止のために、一人暮らしの高齢者が夜に宿泊できる施設があり、同じ課題でも日本と違った方法で解決を図っていた。」との記述から、韓国で直面している健康課題の多くが日韓で共通しているものの、【高齢者の保健福祉対策については韓国と日本で異なる】ところがあり、韓国独自の取り組みがあることを学生は認識していた。

また、「韓国の保健医療福祉は、“場所”“食”“文化”をうまく活用し、地域住民と繋がっている印象を強く受けた。それは、保健医療福祉の様々なサービスが、住民と近接した“場所”で“食”という楽しみを取り入れ、事業プログラム等への集客率を上げる工夫をしていたこと。また、医療の中に“文化”を溶け込ませ、患者の価値観に合わせたケアやプログラムを提供していたことから、そして、セルフマネジメントに対する意欲が高まるよう配慮され、変化する社会に新しい価値観も導入し、攻めの姿勢で活動していると感じた」との記述から、【保健医療福祉事業における場所、食、文化の効果的な活用】について認識していた。

(2) 目標:「韓国の保健・医療・福祉システムを

表2 主な視察施設の概要

施設名	開設時期	規模・スタッフ等	施設での説明内容の要約
国立全北大学 校看護大学	1947年 総合大学 2005年 看護大学 ¹⁾	学生数は、2015年 461人(学士379人、 修士47人、博士30 人、専門看護師課程 5人(老人5人)、教 育大学院0人 ¹⁾	看護教育課程の卒業単位は、140単位である。教職(学校保健 教師)の取得は、看護学科学学生の中から10%を選抜し、さらに22 単位が必要である。保健診療員は、看護大学を卒業後、保健福祉 部長官が実施する教育課程8週、臨床実習課程12週、現地実習課 程4週、計24週間の職務教育を受けなければならない。教育カリ キュラムは国が作成し政府が資格を付与する。処方権は、およそ 130種類の薬剤が対象である。医師未配置で、継続して医師配置 が困難である医療脆弱地域に配置され、11項目の職務を遂行する。 看護師のアドバンスコースとして、専門看護師、産婆、保健教育 士、老人長期療養専門等がある。専門看護師は、13分野の領域が ある。修士課程で33単位取得し、理論試験で合格後、実習を実施 する。保健教育師は、保健教育プログラムの企画・運営・評価等 を遂行する国家資格の専門人材である。
国立全北大学 校病院	1909年 1988年 現名に改 称 ²⁾	1,100床、救急ヘリ 有り。看護師は 1,100人、3交替制 勤務、日中の看護体 制は2:1	診療科は41、2015年の外来患者数は817,468人、入院患者数は 360,396人、手術件数は17,012人、従業員数2,515人。子ども病 院、呼吸器疾患専門センター、地域がんセンター、老人保健医療 センター、歯科病院、健康増進センターが併設されている ²⁾ 。 小児科外来は、子供向けに暖かな配色で壁にはイラストが描かれ ている。このフロアで各検査ができる、例えば放射線部や検査室 があり小児だけの利用が可能である。
全州市保健所	1947年	管轄人口は652,282 人、高齢化率(65 歳以上人口の割合) は12.1%、職員は 140人(医師、漢方 医師、看護師、眼鏡 士、歯科衛生士、放 射線技師、行政官 等)	日本と同様に少子高齢化、糖尿病等の生活習慣病、虐待、DV、 高齢者の孤独死、ホームレス等の課題がある。 国保の対象者に2年に1回の無料健診があり、健診受診率は約 80%と大変高い水準を保つ。当保健所は、住民や保健教師がいない 学校へ出向き、健康教育を積極的に行っている。
金堤老人専門 療養院、金堤 老人専門療養 院昼間保護セ ンター	2013年	職員は、院長、事務 局長、嘱託医、栄養 士、看護師、物理療 法士、療養福祉士、 社会福祉士、調理員 等50人、入所定員 は、療養院61人、 中間保護センター 17人	入所施設(療養院)と在宅施設(昼間保護センター、デイケア センター)の複合運営形態により、身体機能の状態の変化に応じ た対応が可能である。主に、認知症及び老人性疾患により、保護 者の生活に影響を及ぼす高齢者が入所できる。介護保険が適用可 能。運営時間は、昼間保護センターは8:30~18:00、デイケアセ ンターは8:30~22:00、施設は市内にアクセスがよい老人福祉タ ウン内に位置し、老人専用マンションや家族と暮らすための賃貸 アパートも設置されている。元気な高齢者が利用できる福祉館も 隣接し、様々なプログラムや安価(約200円/1食)な食事が提供 されている。
園光大学漢方 病院・産後ケア サービスセン ター	1980年代	職員は、事務局長、 病院長、産婦人科医 師、研修医計4人、 産婦病床数は21床	入院の対象は、自然分娩後3~4日の産婦と帝王切開分娩後5~ 7日の産婦である。費用は2週間で約20万円~35万円、全額個人 負担である。多くの褥婦は出産後3~4日で退院する。その後、希 望により8万円の補助で、自治体が自宅に家事サポートボランテ ィアを派遣、利用は任意である。このような施設の設置は、1/3 が病院併設であり、2/3は単独開設である。産後ケアサービスセ ンターは増加傾向にあるが、少子化の影響により利用者が減少し ている。
金堤サンジヨ ン保健診療所	1990年	行政区画は2里5 村、人口は599名 (65歳以上高齢者 254名、独居高齢者 51人、乳幼児51 人)、名世帯数は255	所長業務は、診察(主に血液検査、血糖測定、HbA1c測定)、処 方(68~108種類)・医療的な介助・応急処置・心臓マッサージ・ 慢性疾患の悪化防止・母子保健業務等である。処方方は、1薬剤90 円、1か月分120円。ルーティンの薬剤を処方し、3~6日で症状 が改善しなければ病院につなぐ。緊急時の対応は、基本、救急車 で搬送。一次治療者1日30名である。この地域では35.5%の人々 が高血圧、20.1%の人々が呼吸器疾患を有する。運動器具が設置 されているため、運動をするために来所する住民も多い。

表3 研修目標達成状況 n=11

単位：人

	1*	2*	3*	4*
1. 韓国の保健医療・福祉システム・看護教育を理解する				
1) 研修で韓国と日本の保健医療福祉の概要の理解が深まった	6	5	-	-
2) 韓国の保健医療福祉における課題を考察した	1	10	-	-
3) 日本の保健医療福祉における課題を考察した	1	10	-	-
2. 韓国の看護実践およびその背景にある価値観について理解する				
1) 全北大学校における看護教育について理解が深まった	5	6	-	-
2) 韓国と日本の看護職種、役割について理解が深まった	6	5	-	-
3) 韓国の看護の背景にある文化、価値観について理解した	9	2	-	-
4) 韓国と比較して日本の看護の背景にある文化、価値観について理解した	7	4	-	-
3. 文化交流およびコミュニケーション能力を高める				
1) 視察先で積極的に質問しコミュニケーションがとれた	5	3	3	-
2) 全北大学校の大学生と積極的にコミュニケーションがとれた	7	4	-	-
3) もっと全北大学校の看護学生と交流できたらよいと思う	10	1	-	-
4) もっと韓国の看護師と交流できたらよいと思う	7	4	-	-

*

1：常に思う 2：思う 3：あまり思わない 4：全く思わない

理解する」について

「保健所と保健診療所には、国が統括する保健情報の一元化のシステムがあり、国及び保健機関同士が日本より密着している印象を受けた」との記述から、【保健情報の管理システムの違い】を認識していた。また、「日本と違い保健所には病院が併設されていたり、訪問看護部署が独立していた。」という記述から【保健医療制度のシステムの違い】を認識していた。

「漢方の病院では、診断名が判明するまで、漢方を用いて対症療法を行い、早期から対応しているところが日本と違っていた。」「韓国では、漢方医療が充実しており、韓国の看護、保健制度を見学して、さらに日本の医療や看護について学びを深めたいと強く感じた」との記述から、【漢方医療での早期対応】について認識していた。また、「漢方薬（一部の漢方薬は異なる）、岩盤浴、鍼灸・指圧などは、日本では補完代替医療と呼ばれ、エビデンスがないものとして低く位置づけられている。補完代替医療と西洋医学がうまく共存した統合医療は韓国の強みであり、保健医療福祉を推進する上でうまく活用されていると思った」との記述から、【補完代替医療と西洋医学がうまく共存

した統合医療】についても認識しており、漢方病院の視察を通じ、日本より進んでいる漢方医療について興味を感じていた。

「産後ケアサービスセンターでは、母体の回復が中心で、褥婦の心理的ケアや母子同室、児のお世話の仕方など母親への教育がなされていなかった。日本のような出産から母体回復のためのケア、母親教育が一貫して同じ施設で受けられる体制が大切なことだと感じた」との記述から、日本にはない産後ケアサービスセンターの視察を通じ、【出産後の一貫したケア体制の重要性】を認識していた。

(3) 目標：「韓国の町中心部、及び過疎地域での看護職の活動を理解する」について

「過疎地域における処方権をもつ保健診療員（専門看護師）の開業は、日本のかかりつけ医とは違った制度であり、このような地域看護の形が韓国にあることを知り、日本でも過疎地や農村部に保健診療所のような機能があれば良いと思った」、「保健診療所は、農村で暮らす高齢者にとって頼れるところであり、心の拠り所となっていると感じた」、「韓国には、日本と同様に専門看護師の資格

があるが、日本と大きく異なる点は、米国の Nurse Practitioner を目指していることと国家資格であることであった。また、実際の臨床現場では、一般看護師と同様の活動をしているが、今後どのように役割拡大を行っていくかが課題であると聞き、大変興味深かった。「処方権を持つ専門看護師の活躍を見て、韓国の看護は、日本よりも医療の分野において深く広がっていると感じた。」との記述から、【過疎地域で働く処方権をもつ保健診療員（専門看護師）の存在】について認識していた。

そして、「保健診療員（専門看護師）になるためには卒業後6ヶ月間～1年間の教育を受ける必要がある。それらの教育を受けられるような土台を看護学生のうちから築くためには、日本よりも深く医療に関する知識を習得する必要があると思った」、「韓国では東洋医学と西洋医学が両立していることで、日本よりも幅広い知識が必要であると思った」との記述から、【看護師基礎教育における幅広い知識の修得の必要性】について認識していた。

(4) 目標：「韓国の看護実践およびその背景にある価値観について理解する」について

「金堤サンジョン保健診療所の保健診療員（専門看護師）においては、地域を知るために独居の方と同居することから始めた」と聞き、大変感動を受けた」との記述から、【保健診療員の地域を知るための努力】について認識していた。

また、「農村での保健診療所には政府からの助成と多くのボランティアが存在し、地域全体が“この地域を良くしよう”という考えをもつ人々が多く、高齢者に対する温かさを感じた」、「参加している高齢者の姿を見て、“自分の健康は自分で守る”という意識が強いように感じた。また、日本に多い“お任せ医療”“なにかあれば病院へ”というような姿勢は参加者だけでなく、病院施設の患者さんにも少ないように感じた」との記述から、【自助・共助・公助の精神】について認識していた。

「金堤老人専門療養院、及び金堤老人専門療養院昼間保護センター及び全州市保健所を見学し、韓国は、古くからの文化を大切にする一方で、“子供は親のもの”“親の介護は子の役割”といった古い価値観から脱し、そうした考え方に縛られない新しい価値観を普及する努力を行っていることがわかった。若い人が親の介護に縛られることな

く、介護関連サービスを活用しながら仕事を継続できる社会を目指しており、古い文化も新しい価値観も尊重していく姿勢は日本にも重要な視点だと感じた」との記述から、【古い文化を大切にする一方、新しい価値観も尊重していく姿勢】を認識していた。

「高齢者福祉館の見学を通して、日本では、その人のADLに合わせた運動を行うという考えが主であるが、韓国では、その人が楽しめるものを行うという考え方を持っているのではないかと感じた。そして、高齢者福祉館では、高齢者が楽しめる様々なメニューが用意され、参加率が高かった」との記述から、【高齢者が楽しめるメニューを用意し、事業参加を促進する工夫】についても認識していた。

(5) 目標：「文化交流およびコミュニケーション能力を高める」について

「文化や歴史が違うからこそ学べたり視野が広がったり、違うのに分かり合えたりというように、“違い”の中に交流の価値や面白さを感じた」、「異国に出向いて人と関わったり想いを伝えあったり、自分の目で見たり聞いたりするからこそ、細かい魅力を発見したり、その国の一人ひとりの温かさに気付くことができた」との記述から、【違いからの学び、直接体験から生まれる気づき】について認識していた。

また、「学生との交流は、積極的にコミュニケーションをもつことができた。韓国語がわからなくても身振り手振りや片言の言葉でも、お互いが一生懸命に“伝えよう”“わかれよう”とする気持ちが大事であり、そのことがお互いを理解できることにつながったと思う」、「国を超えて同じ学生同士としてお互いを理解することは、視野が広がり、様々な意見に柔軟に耳を傾け尊重する気持ちが強まった」との記述から、【言葉の壁を乗り越えてお互いを理解することによる視野の広がり】について認識していた。

一方、「学生との会話は英語が主であったので、やはり英語力が必要だと感じた」との記述から、【語学力の大切さ】についても認識していた。

5. 研修の成果

5.1 施設見学やフィールドワークによる刺激

今回の研修は、専門的交流を主目的とし、多くの保健医療福祉施設の見学を組み入れたが、漢方病院や産後ケアサービスセンター等韓国特有の制

度や施設、職種が存在から、学生は日本との相違を感じ、様々な刺激を得ていた。特に、過疎地域での看護職の活動を理解するために、過疎地域で開業している保健診療所を訪ねたが、韓国の過疎地域では、日本とは異なり、限られた薬剤の処方権を持つ保健診療員（専門看護師）が極めて安価な薬剤を提供し、医療に関する裁量権を持っている。また、日本の保健師のような地区診断、家庭訪問、健康教育も行っている。このような農村地区で活躍している保健診療員の存在に、ほとんどの学生が興味を示していた。

また、見学したほとんどの施設で、韓国文化である床暖房・岩盤浴、鍼灸・指圧を施行する場所が設置されていたことや、漢方が独立した学問領域として医学の中で認知されていたことから、多くの学生が、韓国の「文化」が保健医療福祉の中に浸透していることを感じていた。

これらのことから、現地視察にさまざまな施設見学やフィールドワークを取り入れたことは、学習効果を高める上で大変有意義であったと考える。

5.2 交流プログラムの積極的導入による気づき

異文化に触れることで、日本との様々な差異について気づきを得ることができるとは、短期海外研修では深い文化の学習や文化の違いに関する洞察、文化に対する相対的価値観の獲得は難しいと言われている⁵⁾。

今回の研修でもコミュニケーションギャップや言葉の壁などに遭遇することが予想されたが、多くの学生は、全北大学の学生や一般の人々と積極的に交流し、異国との交流の楽しさを実感し、学びを得ていた。全北大学の学生との交流をプログラムの早い段階(2日目)に入れたことが我々の予想を超えて、交流促進のきっかけになったと考えられる。また、敬老堂での介護予防体操への参加のほか、公園で介護予防体操を行っていた高齢者グループや保健所の保健看護師との出会いなど、住民との思わぬ交流の機会もあり、韓国で暮らす人々の暮らしぶりや価値観、やさしさ、国民性など現地に足を運び、交流しなければわからない多くのことを学ぶことができたのではないだろうか。学びや気づきには個人差はあるものの、この8日間のプログラムでも目標に近づくことは充分できたと考えられる。

5.3 参加学生の異学年交流による学習の波及効果

今回参加した学生は1年生から院生まで年齢の幅が広く、1,2年生にとっては、日本の状況について充分理解していない段階であったため、かなり難しい点もあったのではないかと推察する。しかし、上位の学年が下位の学年に対して、知識の補完を行うなど異学年交流となった場面もあり、幅広い年齢の参加は有効であると考えられる。

5.4 学習意欲や看護観、人生観への影響

韓国の保健・医療・福祉の考え方に触れることにより、日本の保健・医療・福祉について、さらに興味・関心が高まり、今後の学習意欲を触発するきっかけになったのではないだろうか。

加えて、日本にいとわからなかった「違い」からの学びや「直接の体験から得られた気づき」は大変大きかったと考える。地球上に住む同じ人間どうし、お互いを理解しようとする気持ちや行動から、看護していく上での貴重な学びを得たと確信した。また、人生観への影響、人間としての幅の広がりを感じさせるものがあった。

6. 今後の課題と展望

6.1 危機管理体制の整備

海外研修を企画した場合は、研修先の国内情勢に左右されることはやむを得ないことであり、まずは学生の安全を担保することを優先しなければならない。今回、韓国内での感染症 MERS のアウトブレイクにより、実施直前にやむなく中止となったが、当初は、終息の見通しが見えない現状があるにも関わらず、催行の可能性を信じ、中止の判断に大変戸惑った。また、学内関係者の合意や検討要素が曖昧だったと考える。今後は、危険情報が出たときの「研修実施可否の判断基準」を検討し、早期に対応できるよう決めておく必要がある。

さまざまな海外研修企画商品が存在する中、学生にとって、実際に海外研修に参加するに当たって安心感と興味を持って選ぶことのできるプログラムとは、大学が関与して実施できるもの⁶⁾と言われている。当プログラムもまず安全が確保されたうえで魅力あるプログラムである必要があると考える。

6.2 授業としての位置づけ

学習の効果を上げるには、事前事後の学習が有

効^{5,7)}と言われているが、研修催行決定から3月の研修実施までの期間が大変短かったことから事前事後の学習時間を充分とることができなかった。今回は、感染症発生という突発的な事情があったこともあるが、今後は、事前学習はもとより、事後報告会の開催や学生による報告書の作成など、学習時間を担保する必要がある。そのためには、授業の一環として位置づけていくことも視野に入れ、考えていく必要がある。

6.3 引率教員や現地スタッフの介在

教育的効果を期待するプログラムを開発するためには、学生の研修後の自己評価だけでなく、学生が研修前、研修中、研修後において、どのように変化を遂げていくのかを継続的に観察していくことが必要であると言われている⁵⁾。

この点について本研修では十分ではなかったが、今後は、引率教員や現地スタッフなどが、研修中や研修後に十分な観察と振り返り（リフレクション）の時間をもつことやリマインドをしていくこと⁸⁾等、学習の促進者としての役割を果たすこと⁴⁾が重要と言える。

6.4 経費に対する支援制度の導入、単位履修状況を踏まえた対象者の選定

学生が国際交流に積極的に参加するためには、経済的問題、大学での卒業要件に必要な単位履修など安定した学生生活を過ごしていることが前提条件となる⁷⁾ことが考えられるため、経費に対する支援制度の導入⁹⁾や学生の単位履修状況を踏まえた対象者の選定なども、今後考えていかなければならない課題である。

7. おわりに

本学ではグローバル人材の育成を目的とし、韓国をフィールドとする看護短期研修を新規に企画・実施した。研修は平成27年3月に8日間のプログラムで行い、学生11名が参加した。プログラムとしては、改善すべき課題はあるが、目標はほぼ達成できたと考える。

本研修の開催までに、3年間の準備期間を要した。今回開催が叶ったのは、行政機関（石川県と全羅北道）の継続的な協力があってからだと考える。また、海外研修の開催には、受け入れ先との覚書の締結が基本にあることを考えて進めなければならない。そして、研修プログラムの開発に当たっては、「施設見学やフィールドワークによる

刺激」、「交流プログラムの積極的な導入による気づき」等を図ることが重要であり、「危機管理体制の整備」、「授業としての位置づけ」等についても考慮する必要があると考える。

今回の研修は、日本から韓国への訪問であったが、今後は双方向の研修プログラムとして発展していくことを願いたい。

謝辞

本研修を行うにあたり、ご協力いただいた韓国全羅北道対外協力局国際協力課及び石川県観光戦略推進部国際交流課の職員の皆様、全北大学校看護大学の教職員の皆様、各視察先の職員の皆様、大学コンソーシアム石川の関係者の皆様に深謝いたします。

利益相反

なし

引用文献

- 1) 韓国 国立全北大学校看護大学：「大学紹介」「組織及び現状」。
<http://www.chonbuk.ac.kr/contents/labour/labour03/labour0301/labour0301.php?pageKey=56> (accessed 2016/9/1)。
- 2) 韓国 国立全北大学校病院：国立全北大学校病院沿革、患者数、診療科。
<http://www.cuh.co.kr/cuh/main/sub06/sub03.jsp> (accessed 2017/9/1)。
- 3) 三原博光、日高陵好、國定美香、他1名：大学における短期海外研修を通じた国際交流の実践とその成果。人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌, 17(1), 59-64, 2017。
- 4) 工藤和宏：短期海外研修プログラムの教育的効果とは－再考と提言－。ウェブマガジン「留学交流」, 12(9), 2011。
- 5) 小林文生：短期海外研修による教育的効果の再検討－学生の報告書の多面的な分析を通して－。一橋大学リポジトリ, 人文・自然研究, 7, 162-185, 2013。
- 6) 片岡由美子：学生海外研修の概要とその課題－平成17年度、愛知県立看護大学生参加による研修の実施報告。愛知県立看護大学紀要, 12, 59-66, 2006。
- 7) 黒崎真由美：短期海外研修の教育的意義について。湘北大学紀要, 33, 107-124, 2012。
- 8) 和栗百恵：福岡女子大学・海外体験学習プログラムの実践から。ウェブマガジン「留学交流」, 17, 2012, オンライン。

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2012/__icsFiles/afieldfile/2015/11/19/wagurimomoe.pdf(accessed 2017/9/16)

- 9)山内ひさ子：短期海外研修の効果を上げるための取組－長崎県立大学国際情報学部国際交流学科の場合－. ウェブマガジン「留学交流」, 49, 2015, オンライン,

http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2015/__icsFiles/afieldfile/2015/11/18/201504yamauchihisako.pdf(accessed 2017/9/16)

Development and Results of a Short-Term Nursing Training Program in Korea

Hisae TSUKADA, Kazuyo KAWASHIMA, Shiho SONE, Kazuko ISHIGAKI

Abstract

A short-term nursing training program in Korea was developed to foster human resources (Global Personnel) that have a global perspective and can solve regional issues on an initiative basis. After three years of preparation, we conducted eight days of training in 2016. Results suggest that most of the training objectives and learning goals were achieved. Giving tours of the various health and welfare facilities, providing field work, and introducing resident exchange programs were effective strategies for achieving program goals. It is necessary to consider other factors, however, such as the development of the crisis management system, the positioning as a class, and the intervention of the department teacher and local staff. To smoothly complete the training requires obtaining administrative cooperation in the selection of training facilities and coordination with related organizations.

Keywords nursing short-term training, training program development, korean nursing, global human resources training